

カツオドリ飛ぶ海

日比茂樹

絵 西村保史郎



カツオドリ飛ぶ海

日比茂樹 絵 西村保史郎



日比茂樹

カツオドリ飛ぶ海

講談社 1978

251p 22cm (児童文学創作シリーズ)

ひび しげき

カツオドリ飛ぶ海

昭和53年8月10日 第1刷発行

定価980円

著者 ^{ひびしげき}日比茂樹

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 郵便番号112

電話 東京03(945)1111(大代表)

振替 東京8-3930

印刷所 廣濟堂印刷株式会社

双美印刷株式会社

製本所 株式会社堅省堂

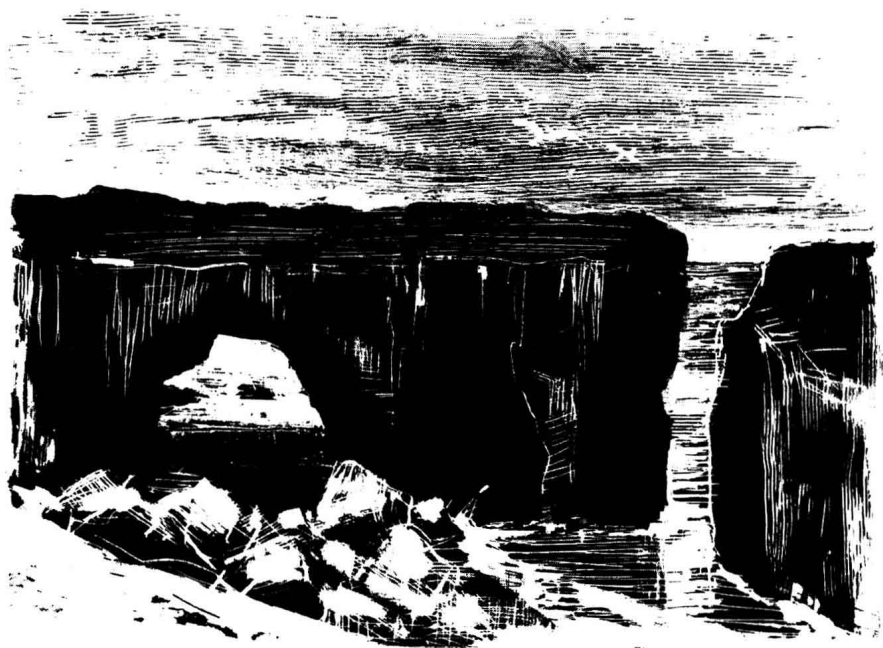
© 日比茂樹 1978 Printed in Japan

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

8093-189774-2253 (0)

(児一)

も
く
じ



第一章 ゼロメートルの町へ 6

第二章 ふしぎな少年 15

第三章 ジュウシマツ 23

第四章 剣道 33

第五章 ふ卵器 42

第六章 名あて人のいない手紙 51

第七章 ひよこ誕生 66

第八章 いったい何個かえったのか 76

第九章 泣かなかった幸子 87

第十章 意外な事実 101

第十一章 夏の公園 108

第十二章 手紙の正体 122





第十三章	ウズワの血しぶき	132
第十四章	とびこんできた鳥	147
第十五章	とび船	156
第十六章	夕ぐれの家	177
第十七章	遠泳	189
第十八章	ヤコウチュウ	212
第十九章	カツオドリ飛ぶ海	218
第二十章	さとのゆくえ	232
結び		243
あとがき		252
著者紹介		254

伊豆諸島では、オオミズナギドリの
ことを、ふつう「カツオドリ」とよ
ぶ。この鳥は、カツオの群れをさが
すいい目印になるからである。



カツオドリ飛とぶ海うみ



第一章 ゼロメートルの町へ

トラックは、首都高速道路を東にむかつてぶんぶんとばしている。

トラックの荷台は足のふみ場もない。ふとん・たんす・茶だんす・勉強づくえ・洗濯機・なべ・本箱・扇風機・ものほしぎお・ポリバケツ・石油ストーブ・ぬいぐるみ……その他、あのせまい家によくこれだけはいっていたものだ、と感心するほどたくさんひっこし荷物がらんぼうに積み重ねられている。

満男はなんとかテレビの上にこしをおろせたが、父の幹太は、二台の自転車におしつぶされそうになりながら、ガラスやせともの類をいれたダンボールをひざの上にかかえていた。そんなふしぜんなかつこうをしながらも、目をとじてうつらうつらしているのは、この二、三日のひっこしのごたごたでつかれがたまっている証拠だ。

（おとうさん、また、からだをこわしたりしなければいいけど……。）



鉄工所につとめる幹太は、わかいころからぜんそくの持病があり、ちよつとむりをするとなんか発作をおこした。一晩じゅうねむれないほどせきこみ、そのたびに何日も工場を休んだ。休みが多いため、工場をくびになったり、自分からやめたりしたことも何回かあった。

それでも幹太はぐちひとつこぼさない。「みんなにめいわくばかりかけてすまないな。」といいながら、ふとんの中でせきこんでいる幹太を見ると、満男は自分のことのように苦しうつらかった。幹太のからだだが、発作をおこすたびにすこしずつ小さくなり、やせていくように感じられ、「満男、このごろおまえ、大きくなったな。」と、幹太にいわれても、なんだかすなおによろこべなかつた。

「ねえ、おとうさん。」

満男の声に、幹太はねむそうな目をひらく。

「ううん？」

「いま、どのへん走ってるの？」

いてて、といいながら幹太はひざのダンボールをちよつと持ちあげ、あたりをながめる。足がしびれてしまったのだろう。

「兜町のあたりだな。」

「じゃあ、もうすぐだね。」

冷蔵庫につかまりながら満男は立ちあがり、あたりを見まわす。どのビルにも、「〇〇証券」と書かれたかんばんがついており、いかにも証券会社の町という感じがする。

トラックのエンジンのひびきが、足もとから全身にこちよくひろがってくる。風が耳もとでうなり、東京の町なみかはるかなたまで見わたせる。

「あと一年たらずで卒業だっていうのに……、満男には気のどくだったな。」

両手の中にマッチ棒をかこいこみ、しんちようにたばこに火をつけながら、幹太がいう。

「そんなことないよ。学校がかわるくらいなんでもないもの。」

「だけどな、六年になったばかりだっていうのに、なかのいい友だちとわかれて、見ず知らずの者の中にはいつていくってことは、やはりたいへんなことだろう。」

「……………」

（なかのいい友だち……、そんなやつ、いただろうか？）

と、満男は思う。ほんとうになかのいい友だち、そんなやつひとりもいなかった。だから、こんど、たまたま都営住宅のあき家の申しこみがあたって、すみなれた沼袋の借家——といっても長屋のようなものから、砂町にひっこすことがきまっても、いやだなあ、という気持ちはほとんどなかった。むしろ、うれしかった。自分の知らないところに行くのは、もちろん不安なことにはちがいがなかった。が、



同時にそれは、自分も知られていない、ということであり、それが満男にはうれしかった。

満男は、どこにでもいるような平凡な少年であったが、平凡な少年の大部分がそうであるように、満男もこれまでいくつか、いまま思ひ出してもはさしくなるようなことをやってきた。

五年生の一学期、クラスでいちばん頭がいいといわれている浜島君江とつくえをならべたときは、テストのたびに君江の答案をぬすみ見てしまった。ある日、先生に職員室によばれ、「これから先生の質問することにこたえなさい。」と、社会の「産業」や「国土」のことをつきつきにきかれた。満男は、二十数個の質問のうち、ほんの二、三個こたえられただけだった。

「おかしいな、いまの質問とおなじテストで、早坂は九十五点もとっているのに……。」

先生は、多少皮肉っぽいちようしでこういった。その目は、（みんなわかつているんだぞ。）といいたげだった。満男は、ただただはずかしく、まっかになってうつむいていた。

それでも満男は、その後もときどき君江の答案をのぞき見ることをやめられなかった。いけない、と思つていても、どうしてもわからないような問題にであうと、意志とは無関係に目玉がそつちにくぐりてしまふのだ。

そんなあるとき、君江が、

「ごめんね。きょうの分数のテストの③の②、わたし、約分するのうつかりしてたわ。」

と、いかにもすまなそうにいったのである。満男はいっしゅん、なんのことかわからなかった。

「3117なら、3で約分できたのにね。」

君江は、ちよつとくやしそうに、重ねてこういった。満男はやつと君江のいう意味がわかった。それは、分母のちがう分数のたし算・ひき算がいっしょになった計算問題であつたが、とうてい満男の手におえるような問題ではなかつた。満男の目玉はぐるつとうごいて、君江の答案紙から3117という答えをぬすんできてしまった。君江は、その答えがまちがつていたことを満男にあやまっていたのである。

（浜島は気づいていたんだ！）

満男は、足のうらまで赤くなつた。君江にかえすことばのたつた一つも見つけられなかつた。

そのときから、満男はいっさいカンニングをしていないが、先生とともに目と目があつたり、うしろのほうの席にうつた君江が、テストのあと、「どう？ 早坂くん、できた？」などと話しかけてくるたびに、いたいようなはずかしさを感じないわけにはいかなかつた。

これとおなじようなはずかしい経験は数多くあり、そのことを知っている者がまわりに何人もいるということは、なんとなく息苦しく、満男をおどおどさせた。

すみなれた町、かよいなれた学校をはなれることが、満男にとってかならずしもさびしいだけでな

い原因はこんなところにもあったのだ。

トラックは、錦糸町から首都高速をはずれ、車でいっぱいの通りを走っていく。「扇橋二丁目」と書かれた交差点を左にまがる。人家が低い軒をならべて密集し、町全体から、白っぽいような、ほりっぽいような印象をこうける。

「このへんから、むこう一帯が砂町だ。」

幹太がひとりごとのようにつぶやく。

「あつ、ミーだ！」

満男がさげんだ。トラックがぐんと加速したとき、たんすのひきだしがすつとひらいた。そのひきだしの中から、ネコのミーが顔をのぞかせたのだ。ミーは、満男と目があうとあわてて顔をひっこませ、ひきだしも、信号でトラックがとまると同時に、元のさやにおさまった。

「おとうさん、ミーだよ。いま、たんすのひきだしから顔だしてたんだから。」

満男は、よろよろと立ちあがってたんすのところまでいき、三段めのひきだしをあけた。

「ニャオー、ニャオーン。」

ミーは、おあいそ鳴きをしてみせた。たしかに妹の幸子がかわいがっていたミーだった。しかし、それは幸子が友だちのだれかにやってしまつて、ここにいるはずのないミーだった。

「幸子のやつ、やっぱりミーをつれてきたんだ。」

「しよがないなあ。団地じゃ生き物を飼えないことになつてゐるからつて、あれほどいつといたのに。」

幹太は、苦笑しながらいった。

「どうする、おとうさん。」

「どうするつていつても、トラックの上からほうりなげるわけにもいかないだろう。」

「でも、団地じゃ、飼えないんでしょ。」

「規則ではな。」

「じゃあ、どうするのさ。」

「ま、あとでゆっくりかんがえるさ。」

そのとき、荷台と運転席のあいだのガラスが、ダンダンと鳴った。妹の幸子と母の育代が大きな口をあけて、ガラスのむこうでなにかいっている。

「え、なに？」

満男には、ぜんぜんふたりの声がきこえない。

「だめ、だめ、きこえないよ。」

満男は横に手をふつてみせた。

「もうすぐつくわよ。」っていつてるのさ。ほら、満男、あそこの団地だ。」

幹太の指さすほうに、大きなベージュ色の建物がいくつもそびえていた。ベランダのいたるところに洗濯物がほされ、風にひるがえっている。

「おとうさん、すごくいいところだね。」

「うん、そうさなあ、まえの長屋よりはましだろうなあ。さあ、ついなら荷物を五階まではこぶのがほねだぞ。満男、しっかりたのむぞ。」

「よし、まかしとけて！」

トラックは橋をわたっていく。ここらへんの橋はみんな地面より高くなっており、川の水面が信じられないほどの高さまできている。

たしかにここはゼロメートル地帯だった。